デューイの思想形成と経験の成長過程

行　安　　茂

1．なぜ私はデューイの思想形成に関心をもったか

私は 1954 年 4 月から 1961 年 3 月まで広島大学大学院において「自我実現」の研究をしてきた。1965 年 4 月 22 日、私は文学博士の学位を受領した。私は 1972 年 5 月 3 日から 1973 年 4 月 30 日まで私学研修福祉会の在外研究員としてオックスフォード大学に留学し、ベリオル・カレッジにおいてグリーンの遺稿等の調査研究をした。1973 年 2 月 2 日、私はアメリカの南イリノイ大学で講義の依頼を同大学のＳ・モリス・エイムズ教授（『初期デューイ全集』1 － 5 の編集委員の一人）から受けた。講義の日程は 1973 年 4 月 23 日（月）19：00 － 21：00 であった。講義のタイトルは「T. H. グリーンとデューイ」であった。1973 年 2 月 3 日から 4 月 14 日まで講義の準備をした。

まず、デューイの論文「グリーンの道徳的動機論」（1892）、「道徳的理想の自我実現」（1893）、デューイの著書『哲学の改造』（1920）をボードリ図書館で精読した。そして講義案（12,000 字）を書いた。

私はデューイの文章から深い感銘を受けた。「自我をそのとき可能な、最高の、最も充実した活動の中に見出し、自我（私はこれを完全な関心と考える）との完全な同一化の意識において行為することが道徳であり、実現である。」（*EW*, 4, 51 頁）デューイはなぜこの点を強調したのであろうか。彼の疑問は自我実現の理論が固定した自我のための行為として考えられるか、それとも現在の、完全な行為として考えられるかにあった。デューイは「道徳は何らかの必要な行為をそれ自身以外のある目的に向かっての単なる手段へと品位を下げることにあるのではなくて、それをそれ自身のためにすること、あるいは繰り返していえば、それを自我としてなすことにある。」（*EW*, 4, 52 頁）という。デューイはこれを「注意の集中」と呼ぶ。

Shigeru Yukiyasu（岡山大学名誉教授、日本デューイ学会理事）

本稿は第 1 回世界市民教育シンポジウム「学びを生活に取り戻す――世界市民とジョン・デューイ」（2022 年 10 月 22 日、於・創価大学）のセッション「デューイの思想形成――日本のデューイ研究の視点から」における基調報告の原稿である。このセッションは、行安茂編『デューイの思想形成と経験の成長過程』（東京：北樹出版、2022 年）を特集したものであり、筆者はその編者として自身のデューイ解釈を報告した。

2. グリーンのデューイへの影響と経験の連続性

デューイに大きな影響を与えたのは、グリーンのみではなくて、ワレス、二人のケアド、故ホールデン卿でもあった。これはデューイの論文「絶対主義から実験主義へ」(1930) によってよく知られている。デューイがヘーゲル主義を知ったのはG・S・モリスを通してでもあった。デューイはグリーンについて三つの論文を書いた。私はすでにグリーンについての二つの論文を紹介した。第三の論文は「トマス・ヒル・グリーンの哲学」(1889) である。デューイはその初期において二つの著作を刊行した。その一つは『批判的倫理学大要』(1891) である。もう一つは『倫理学研究—シラバス』(1894) である。前者はグリーンの『倫理学序説』(1883) についてのデューイの批判的著作である。後者は「実験的理想主義の理論」に基づいた心理学的倫理学である。この本はデューイの独創的著作として注目される。

デューイの出発点は衝動の調停である。デューイによれば、衝動は盲目的ではなくて、ある対象によって調停される。彼は以下のようにいう。「子どもは、自然的衝動によって手を明るい色に向けて出す。その手はこれに触れ、新しい経験—接触の感じ—を得る。これらは次にはさらにある行為への刺戟となる。子どもはそれを口に入れ、味わうなどする。」(*EW*, 4, 236 頁) デューイは衝動と経験との関係は原因と結果との相互作用であると考える。彼は「あらゆる衝動のあらゆる表現は他の諸経験を刺戟し、これらは本来の衝動に反作用し、これを修正する。このようにして引き出された諸経験の反作用は道徳的行為の心理学的基礎である。」(*EW*, 4, 236 頁)

デューイはあらゆる衝動は知性と共に作用すると考える。二つは双生児である。それらは自然に相互に結びつく。このようにして目的は手段と調和する。目的が衝動と知性との共同作用によって達成されるとき、経験は連続的になる。達成された目的は次の新しい目的への手段である。前者は後者と結びつく。かくして目的と手段とは相互的となり、連続的となり得る。これが成長の過程となる。

3. デューイの成長論と現在の活動としての善

デューイは「教育を後の生活のための単なる準備として考えることを止め、現在が十分意味をもつようにせよ。」(*EW*, 4, 50 頁) という。この文章の中には逆説が含まれている。なぜかといえば「それ自身のために続けられるに十分価値をもたない活動は何か他のものへの準備として極めて効果的であり得ない。」(*EW*, 4, 50 頁) からである。デューイは現在の活動の中に価値と意味とを見出す。このことは教育が遠い目的への単なる手段ではないということである。デューイはこのようにして現在の活動は目的を実現することができるだけでなく、意味をももっていると考える。このことは成長の過程を理解するために非常に重要である。

デューイはある目的とこの目的への手段との間には密接な関係があるという。普通では目的は手段から分離している。目的が達成されたとき、次の目的を想像することは考えられない。たとえ目的の観念が想像されたとしても、その目的を達成する手段は綿密には研究されない。目的を実現する計画およびこれを達成する効果的手段は発見されないであろう。デューイは以下のよう

にいう。「悪い人間とは、彼が今までいかに善かったとしても、今低下しつつあり、より善くなろうとしていない人である。善い人間とは、彼が今までいかに道徳的に価値がなかったとしても、今、より善くなろうと動きつつある人である。このような考えは人をして自分自身を判断するとき厳しくし、他人を判断するとき人間的にする。」（*MW*, 12, 180-181 頁）

ここには三つの重要な点がある。第一は個人および集団を判断する標準である。大切な点は彼等が今ここでより善くなろうと動いているかどうかということである。彼等は今新しい方向に向かって動こうとは限らないことである。第二の点は彼等が「ある固定した結果」を達成したとき、この達成感に満足してしまい、新しい方向に向かって動くとは限らないことである。第三点は成長の感覚をもっている人は「自分自身を判断するとき厳しく、他人を判断するとき人間的になる」ということである。なぜこれが可能であろうか。そのような人は他人に対して寛大な心をもっている。その心は非常に静かである。彼は利己的ではなく、他人を客観的に判断する。

デューイは「成長それ自身が唯一の道徳的目的である。」と結論する。このことは成長が現在の活動それ自身であることを意味する。デューイはこの点について以下のように説明する。「目的は最早到達すべき終点または限界点ではない。それは現状を変容する能動的過程である。最終目標としての完成ではなくて、完成しつつあること、仕上げつつあること、洗練しつつあることが生きる上での目標である。正直、勤勉、節制、正義は健康、富や学問と同様に、もしそれらが達成されるべき、固定した目的を表現しているならば、そのように所有されるべき利益ではない。それらは経験の質における変化の指示である。」（*MW*, 12, 181 頁）

デューイによれば、成長の過程は人間が生きている状況を「変容する能動的過程」の活動である。成長は環境の絶えざる変化である。それが現在の状況への適応である。

4. デューイは理想と現実との関係をどう考えたか

デューイは『誰でもの信仰』の中で神をどう考えたか。神は理想と現実とを統一すると彼はいう。「理想と現実との有効な結合の機能は私には霊的内容をもつすべての宗教における神の概念に実際に結びつけられてきた力と同一であるように見える。そしてその機能の明確な観念は現代の差し迫った必要であるように見える。」（*LW*, 9, 35 頁）

ここにはデューイの視点が示されている。理想は想像によって投影される。現実はそこで人間が生きている現実の状況である。理想と現実との間にはギャップがあるであろう。なぜかといえば現実の環境に対しては、抵抗があるからである。人はいかにしてこのギャップを克服することができるか。人はいかにして自己自身を環境と調和させることができるか。われわれは霊と心との関係を考察しなければならない。デューイは「芸術家、科学者、市民、親は、彼等がその職業の精神（霊）によって動かされている限り、見えないものによって統制されている。なぜかといえばよりよいものに向かうすべての努力は現実への執着によってではなくて、可能的なものへの信仰によって動かされているからである。」（*LW*, 9, 17 頁）という。

なぜ彼等は霊によって動かされているだろうか。私は霊は心の訓練なしには理解できないと

考えている。いかにして心は訓練されるのであろうか。デューイは「現状に適した理想的目的の想像は訓練された心の成就を表現している。」（*LW*, 9, 35 頁）という。彼は心がどのようにして訓練されるかについては詳細には説明していない。しかし、われわれは『経験としての芸術』の中に心を訓練する方法を発見することができる。デューイは以下のようにいう。「呼吸に似た経験は吸い込んだり、吐き出したりする呼吸のリズムである。それらの連続は中断し、合い間、ある局面が終わりつつ、他の局面が今始まり、準備しつつある時間の存在によってリズムとなる。」（*LW*, 10, 62 頁）

デューイが呼吸の連続に注目したのは、W・ジェームズによって示された経験の理論によってである。この経験は日本の禅仏教においても注目されてきた。禅はわれわれの日常生活の中で吸い込んだり、吐き出したりする呼吸に注目することを重要視してきた。それは今ここでのわれわれの動作と吸い込んだり、吐き出したりする呼吸のリズムとを統一する修養であった。しかし、われわれはこのリズミカルな連続性を見失いがちである。なぜかといえば呼吸のリズムと日常生活の行動との調整は静動一如の統一によって可能であるからである。とくに難しいのは吸い込む呼吸と吐き出す呼吸とが常に全自我と一つになり、しかも自由自在に活動することであろう。デューイもこの難しさをすでにある程度知っていたように見える。彼は呼吸の連続過程について「ある局面が終わりつつ、他の局面が今始まり、準備しつつある時間の存在によってリズムとなる。」といっているからである。この微妙な変化の流れを常に自覚することが求められるが、デューイがこの点に注目していたかどうかが問われよう。